

「病院」が生れるまで—編集後記として

凡そ10年ほど前のことであつたが、医療問題、国民保健問題に就いて大なる関心をもつてゐる青年医師達が集つて、我國病院問題について幾夜も幾夜も討議したのであつた。その時の結論として、医療の中心はどうしても病院におかねばならない。病んでゐる人の最後の防壁は病院であつて、此の病院が人的にも、物的にも完備せられ、而も國民一般の負担に堪へられる様な経営がなされることが最も願はしいといふことであつた。

時は移り、當時の青年医師達も、戦争と敗戦のいたでに往年の元氣もなく、既に皆頭に霜をまじえるようになってゐた。本年の早春のある日のこと、また昔の同志相集つて、旧情を温めるのも又楽しからずやで、東京近郊の某海岸で一夜の飲をつくしたのであつた。嘗ては医療問題のためには一身を捧げて辞しないと決心した同志達のこととて、いつとはなしに話は病院問題に移つて行つた。談たけなわに及びG君が「病院」と云ふ雑誌を世に送つたならば、きつと我國病院の質的発達の爲に貢献することが大であらうと提言した。もとより一同に連論があらう筈もない。

その後間もなく「病院」を発刊する準備を委された小生は、先づ病院問題の当面の責任者であらうと思はれる厚生省國立病院課長小沢氏を訪ねたのであつた。小沢課長及び同課吉田技官を交えて懇談一刻にして賛意を得たのである。当時厚生省当局に於ても、病院管理を科学的に取りあげ、病院管理を教育する研修所を創設して、適格者をして病院管理に当らしめる案が考へられてゐた際にはあり、こちらの意図以上に雑誌発行について熱意をもたれたのであつた。かくて別記の様

な、我國病院事業に関する諸權威を編集委員にお願いすることに、すらすと運んだのであつた。

5月の始め、編集委員一同相会して編集会議を催したのであるが、その時、「我國病院はまだ民衆の爲に運営せられてゐない」。「経営管理にも診察設備にも、又人的整備にも非科学的であり、近代文化から遠ざかつてゐる。新しい科学を打ち樹てる要がある」。「米國ではホスピタル・アドミニストレーションに関する講座が開かれてゐる医育機關がある」。「総司令部公衆衛生福祉部では日本の病院を近代的病院のあるべき状態へと指導してゆく決意である」。「新医療法は病院を医療の中心として、新しい医療制度を打ち建てようとしてゐる」。等々貴重な言々盡きるところがなかつた。

此処に創刊1号をお送りします。本誌の編集に關しては厚生省吉田技官が當ることになつてゐます。病院問題には幾多研究すべき緊要なことがあります。読者識賢のよき忠言と御鞭撻とを願つてやみません。一切が無とも云ふべき状態から出發するのでありますから、諸賢のよき研究、よき体験の御発表を戴き、俱学俱進したいものと存じます。

久松栄一郎

編 集 委 員

橋本 寛敏(聖ルカ病院) 尾村 偉久(厚生省)
吉田 幸雄(厚生省) 守屋 博(東京第一病院)
千種 峯藏(済生会) 木下 正一
久松栄一郎

★投稿お願い★ 病院管理、病院經理、病院設計、病院設備、医療費等はもとより病院隨想等に關する御投稿をお願いします。但し原稿は横書き、平かな、口語体、出来るだけ常用漢字内で願います。原稿の採否は編集者に一任して下さい。採用原稿に対しては薄謝を呈します。

病 院 (第1巻第1号)

昭和24年6月25日印刷

昭和24年7月1日発行

発 行 所
東京都文京区駒込林町172

學 術 書 院

發 賣 所 東京都文京区本郷6-20

定 價 80 圓 概算前金 500圓

編 集 人 久松 栄 一 郎

発行兼印刷人 石 村 卓 三

メデイカル・サービス・ステイション